
震災後、宗教者として

池田奈津江¹

平成 27 年夏の被災地での経験を軸に、宗教者としての感性、感覚というものを念頭におきつつ、訪問ボランティアでの気づきと、慰霊と郷土芸能による祈りの継承、飯舘村の信仰より神職の役割等について考える。

¹ いけだなつえ：弥生神社権禰直

1. はじめに

東日本大震災は、二万人の死者・行方不明者を出し、四年半経った現在でも多くの方々が仮設住宅に暮らし、被災県内外で避難生活を余儀なくされている。平成二十七年夏、私は東北の地に幾度か足を向けた。福島県いわき市小名浜での「千度大祓」、南相馬市の相馬小高神社が舞台となる相馬野馬追、宮城県気仙沼市唐桑半島で開催された「三陸海の盆」、宮城県内での仮設住宅の訪問ボランティア、そして気仙沼市本吉町小泉地区への訪問と神社参拝——。平成二十三年十一月、私は三年間の研修期間を経て正式に神職に就いた。以後、私の神職としての歩みは、被災地との関係の中にあった。震災後に結んできたいくつもの縁によって今もこの地へと引き寄せられる。本稿を進めるにあたり、これまでの経緯についてまずは記そうと思う。

震災後の縁と信仰

震災後しばらくは何もできぬもどかしさを抱えながら、SNS で発信する支援団体、NPO、神道青年会や所属学会が募る、清掃や資材の運搬、支援物資の発送、被災地特産品の販売といったボランティア活動など、被災地訪問の機会を得ては飛び込んでいた。継続的かつ主体的な支援をしていたわけでもなく、微力でしかないと実感しながら参加していた。その間、神職としてできることも見いだせなかったが、被災した各地を守る神社を一社でも多く参拝する。そのことだけは心に決めていた。義務感にも似た衝動があった。

様々な縁を頼りに、被災地の神社を参拝してまわった。ひっそりとその土地を守る祠だけが立つ神社も多くあった。震災後に避難所となり、その後仮設商店街の事務所となっている気仙沼市の紫神社。震災直後から全国からの支援物資の受け入れ窓口となり、奥松島の月浜の海苔産業や被災神

社の復興のため、職員一丸で支援活動をしている仙台市の大崎八幡宮。原発事故のため避難されている住民の人たちの帰る場、離れ離れになった住民を結びつける場になるよう尽力している南相馬市の日鷲神社など、挙げきれないが、地域の核となり地域の枠を超えて、地域の人たちの支えとなり、復興の原動力となる神社があった。

被災地の神社を参拝するたびに様々な方と出会い多くを教えられた。被災地で奮闘する神職の方々は、地域貢献する意志と、支援を呼び込む発信力、行動力とともに、その土地への愛情と郷土や地理についての幅広い知識、そして何より神道への深い信仰心を持っておられた。支援活動をされている宮司さんがつぶやいた「神様が見ていてくれる」という言葉をことあるごとに思いだし、自分の心に重ねている。

そして各所での講演やシンポジウム、被災地での活動において出会う他宗教の方々からも多くを学んだ。「宗教者は現場に立ってください」という、震災後のシンポジウムで登壇された、サンガ岩手代表の吉田律子さんの言葉は、今も心に留めている。徐々に、宗教者とは？という問いが生まれ、神職であると同時にその枠を超えた宗教者であるという自覚をもつことが私にとっての課題となった。どのような神職であるべきか、ありたいか、宗教者たりえているかということが今の私の行動や思考のひとつの指針になっている。

東北へと心もエネルギーも寄せすぎたため、しばらくは奉職先の神社へのうしろめたさがあったが、気づけば被災地にいながらも、奉職神社の神様の存在を深く心に抱くようになっていた。被災地において震災を通して、神職としての自覚や責任感とともに、この年月で育ててきた私なりの信仰が、様々な場で活動する際の支えになっている。

非当事者として書くということ

私自身は研究者でもなく、神職として神道界全体を概観し、意見を提示するような立場にもない。ただ、一人の駆け出しの宗教者として、震災後、被災地での経験を通して気づいたこと感じたことを、とくに次世代の神職

の人たちへ向けて、共に考えていくことを念頭に本稿を記した。

そのなかで宗教者としての「感性」、「感覚」がキーになることに気がついた。ここで考えている宗教者としての「感性」は、他者の悲しみに共感しようと努めるうちに働く感性であり、「感覚」は、『原子力と宗教』のなかで鎌田東二氏が語っていた、人間が何かを畏怖する、畏敬するときに働く「身体感覚の根源にある、深層にある感覚」と近いものであるように思う。鎌田氏は、理性だけでなく本能に近い、よみがえらせていくものとして、その感覚を「異変に対する生存感覚」と表現している。^①

また、これまで震災について、被災地の状況について、経験的に感情を含めて書くことは、非当事者ゆえのためらいがあった。だが、磯前順一氏が記すように、非当事者だからこそ、経験を語ることを考えた。磯前氏は、多くの表現者が「失語状態」に陥ることで、ステレオタイプ化した被災地のイメージが、人々の意識を震災から遠のかせていることを指摘し、「非当事者だからこそ、状況をえぐり出す言葉を発する役割を引き受けなければならない」と言う。さらには、それぞれの地域での経験が孤立させられ、連帯のビジョンが描けなかった、戦後日本史の問題と関わると指摘する。^②

震災の記憶の風化が言われる今日、あの時のままにとどまらざるを得ない人たちがいる現状を伝えられるようにと願う。

2. 傾聴

平成二十六年七月、初めて仮設住宅への訪問活動に参加した。宮城県内のボランティアで知り合った僧侶の方にお声がけいただいたのがきっかけだった。それから、宗教者を中心とした訪問ボランティアの活動に参加して一年が経った。この会での出会いと活動が、宗教者として歩むための大切な転機だったように思う。

宗教者による傾聴活動については、宗教者災害支援連絡会の報告会やその他、関連のシンポジウムなどにおいて、実際に活動されている方の話を

聞く機会が何度かあった。しかし、傾聴や心のケアについての専門的知識も経験もなく、一步を踏み出せずにいた。それまで、被災者の方々の心に向き合っていたかといえばそうではなかったと思う。部外者として一定の距離を保ち、間接的に遠くからその声を聴いていただけだった。一方で、震災支援における心のケアの必要性が、時が経つほどに言われており、その認識が私の中でより強くなっていった。そして、訪問活動をする、そこには復興の流れの中で表面的には見えない被災地の方々の心や日常があった。

仮設住宅での日常と固有の経験

宮城県だけでもいまだ二万七千人もの人たちがプレハブの仮設住宅に居住している（平成二十七年七月三十一日現在）。⁹震災から四年が経つ被災地で、いまだに仮設住宅に住んでいる方がこれほどまでにいる現実を、ある被災地の方は、「人権問題だ」と言った。そして実際、仮設住宅での生活が心身にこたえると訴える人たちに驚くほど頻繁に出会った。「菓がないと眠れない」、「体がだるくて外に出る気がしない」という悲痛な表情。「今後どうなるのか先が見えない」という不安げな表情。「ここで死んでいくんだ」という諦めの表情。町の復興は進み、復興住宅への転居も各地で徐々に進む中、「取り残されていくようだ」と言われた方の怒ったような悲しげな表情があった。また、狭苦しくて大声をあげたくなる衝動に駆られると苦笑した女性。以前の活気ある漁師生活の話をしたのちに力の抜けたように笑い、黙り込む男性。寂しそうに長年過ごした家や庭木やそこでの生活を語る女性がいた。そして、新たな住居に移ればすべて解決ということもない。復興住宅にあった住民の方の戸惑い、疲労感。何よりこれまで失ったものの大きさは計り知れない。

訪問するうちに、家庭祭祀の方法など神道に関わる相談も受けた。未熟な神職ゆえに恐縮しつつ丁寧に慎重に答えるよう努めた。神道も仏教も大切に信仰されている方が多く、私も自然と手を合わせた。あるお宅のお仏壇に焼香して手を合わせ向き合うと、ともに祈ることで生まれた静かな柔

らかな空気を感じた。また、この場にいる許しを得たような感じがした。

悲しみを抱えた心には時間は止まったままだと、いくつもの場面で痛切に感じた。わずかでもどこか触れると止めどなく悲嘆の言葉があふれてくる。なぜ自分たちがこのような目に合わなくてはならなかったのか、死んでからどうなったのか、そのような問いには答えることなどできない。ただ嘆きや問いの奥にある感情に触れたいと思った。そのようにお伝えすることが幾度かあった。

扉が開かないこともよくある。そんな中、挨拶を届けることの意味と、様々な気持ちを込められる「こんにちは」という言葉の響きの深さに気がかされた。私自身、他のボランティアの方の挨拶の声が開き、心に響くことが幾度もあった。ただ、言葉にならない感情に耳を澄ます。役に立つということではなく、共有する一瞬の時間に穏やかな空気が流れれば、心が温かくなればと願う。このことが私にとってこの活動の目的のようになった。

また、ここで触れなくてはいけないことは、訪ねた先の皆さんの明るさややさしさである。プランターで育てた花や野菜、手芸作品や写真を、立ち寄った私たちに見せたり語ったりしてくださる。時にはお茶やお食事をいただき、暑い時、寒い時にはいたわりの言葉をかけてくださる。とてもあたたかい。ただ、とても身近に悲しみや死がある。

ある訪問時に、亡くなった方々の名前の載った新聞記事を示してぼろぼろと涙を流した女性がいた。「自分は生き残ったけれど若い方がこんなにも亡くなっている」と。時々そうして記事を眺めるといふ。ご自身も震災の日に壮絶な体験をしていた方だった。ひとりひとりの名前を確認しながらひとつひとつの死を心に刻むかのようだった。

何度目の活動からか、「亡くなった方を感じながら」ということを強く自分に課すようになった。被災地で向き合う方々は、震災の日の恐怖を、亡くなった方々の固有の記憶を、日々背負ったままである。苦し紛れだが、活動の合間の期間に震災直後の映像や文章になるべく多く触れて、自分を引っ張り込むように意識した。死は決して知ることはできない、想像では決して届くことのない固有の経験である。「死は、生者の認識、価値観に

は決して還元されない。「死はあらゆる解釈を拒む」。^④ 解釈できないが、感覚で近づけるよう努める。そうせずにはいられないものがあった。非当事者は、当事者の悲しみも死も到底知りえない。知りえぬ何かがある。そのことにほんとうに到るよう向き合い続けるべきなのだろう。

宗教を超えて祈る 語り合う

訪問活動の終わりには毎回、合同の祈りの時間がある。多くの人たちが亡くなった海に向かうと、圧倒的な心身への重み、感情の高まりがある。私は宗教の種類にはこだわらない。というより、その場に立てばそのような余地もない。慰霊の祈りは足りることなどない。ただ無心にひたすらに祈ろうと強く思う。

緊張し、集中し、全神経と心を捧げる。この活動では、逆に励まされるとか元気をもらおうということはなく、迷いや疑問で揺れ動くことがたびたびだった。だが、その地に立つと不思議と普段にはない素直な落ち着いた気持ちでいられた。静かに内深く根が伸びる感覚があった。それは、他の参加者の方々との交流によると思う。

活動には、震災後から傾聴活動を数十回と重ねてきた僧侶の方々をはじめ一般の方々が毎回数人ずつ参加し、サポートし合い言葉を交わしながら活動をしている。私自身、その中にいることで、素直に正直であろうと思った。それは否応にも私の内面と向き合い、真っ白に戻されるような感覚だった。ここでの交流は、活動そのものとともに自省の機会となった。私は彼らの発する言葉を浴びて心を洗われていただけにすぎない気がするが、あの場には宗教に関わる者同士の「宗教的縁」のようなものがあったのかもしれない。

金子昭氏は「宗教的縁」を、「共に単独者としての精神的＝霊的自覚を持った者同士の縁で結びついたあり方を取る」とし、以下のように説明する。

単独者として生きる人は、その内面において何らかの宗教性（超越

的存在とのつながりの感覚)が存在することに気づいている。(略)
超越者とのつながりにおいて内面性が豊かであれば、教えは異なってもまた特定の教えこそなくとも、充実した人格的關係を形成することができる⁶⁾

また、この活動で気づいたのは、自他の心の内を表現する豊かな言語力、表現力が求められるということである。心の奥や目に見えないものを語る言葉。それを外に発することも宗教者の役割のひとつだと思う。場に溢れる言葉によって、場の空気が変わったり生成されたりするだろう。

言葉や語りについて、訪問活動での一つの出会いを思い出した。震災後、多くの小説を読み返している女性のお話を伺った。震災前と読んだ印象がまるで異なり、目の前が少し開かれて外出をする気持ちになれたという心の変化を語られた。現実社会の隙間から異世界へと踏み出す、私も愛読していた小説だったため、とても抽象的な語りが私の心に通じてすとんと落ちた。その女性が物語から抱いた、単なる虚構ではないある種のリアルな感覚を想像した。

交感というのだろうか、ささやかな触れ合いの場——心奥の言葉や死や魂や異世界を語る言葉、それらを受け止め発する場——が、苦悩が多い地にはとくに求められるだろう。同時に、この国の社会全体にも求められている。そんなささやかだけれど心奥に届く交流のうちに、行き詰まった人の心や、閉塞感が蔓延した社会にも、小さな風穴が開くのではないだろうか。また、そこに新たな「宗教的縁」が生まれていくように思う。

神道は、傾聴や心のケア、グリーフケアといった領域には積極的ではない、個人の救済といったことが教義にはないと言われる。しかし、それぞれの神社で多くの神職の方々は地域の人たちと語り、相談役になっている。昔から社会的に神社はそのような場であった。その素地の上に、他の専門的な領域や他宗教の方々からの学びを、緊急時には他所でも対応できる知識や実践的な学びを重ねていきたい。志を同じくする人たち、各地で活動する神職、宗教者の方々と共通の言葉で語り合う場を共有したいと思う。

3. 祈りの継承

平成二十七年七月二十日の海の日、福島県いわき市のアクアマリン福島において、今年で五回目となる「東日本大震災慰霊鎮魂ならびに復興祈願祭ならびに千度大祓」（「いわき大祓の会」主催）が斎行された。「千度大祓」では、百人の神職と参列者によって「大祓詞」を十卷奏上する。年々、徐々に全国からの神職の参加は困難になっている中、平成二十四年の第二回から、将来神職となる國學院大學神道文化学部の学生たちが毎年、約五十名参加している。⁶私も同様に四度目の奉仕となった。

慰霊の祈りと郷土芸能

「千度大祓」では、この神事の趣旨や「大祓詞」の意味に基づいた奉仕者共通の願いとともに、それぞれがそこに意味や思いを込めるのだと思う。自然に向かい、災害無きよう。亡くなった方々の御霊に慰めを。自然を汚した人間への許しを——。震災と原発事故で負った深い痛みを抱えるこの地で、海に向かい参列の方々と共に奏上する。参加者は、一体となった祈りの中にありながら個人的な思いも込め、その祈りの経験を心に持ち続ける。そしてまた神事が繰り返され引き継がれることの貴重さを思った。

この日の慰霊祭では、浪江町請戸地区に伝わる「田植え踊り」が奉納された。もとは請戸の荏野神社の御例祭で奉納されていたが、震災により神社は甚大な被害を受けた。全国各地に避難している請戸芸能保存会の方々が支援を受けて復活させ、今年もまたいわき市にて奉納された。二百年もの長い間、脈々と引き継がれてきた踊りを観ながら、祀る人、奉納する人が離れてしまった、この踊りが営まれてきた地に思いを致さずにはいられなかった。

翌月十一日には、今年で五回目の「三陸海の盆」（「三陸海の盆」実行委員会主催）が、気仙沼市唐桑半島の御崎観光港で開催された。平成二十三

年の東日本大震災以降、毎年この日に、三陸沿岸各地で会場を変えながら郷土芸能が競演する。郷土芸能の披露、継承を目的としながら、慰霊の行事でもある。郷土芸能が、亡くなった方と参加者とのつながりをも再生させる。参加者は白菊の花を供え、手を合わせる。そして午後二時四十六分には皆で黙祷を捧げる。この行事の間、子供たちに大人が「慰霊」の意味を説明したり、黙祷のやり方を教えたりする場に一度ならず出会った。慰霊という行為やその心が次世代に継承されていく場を目の当たりにして、心動かされると同時に私自身の役割でもあると気づかされた。

海に面した舞台上で、唐桑町の鮪立大漁唄込、本吉町の大谷大漁唄込、宮古市の黒森神楽、大槌町の臼澤鹿子踊、釜石市の桜舞太鼓、北上市の北上鬼剣舞、陸前高田市の広田御祝い、南三陸町の行山流水戸辺鹿子躍など次々と披露され、お年寄りから子供までが誇り高く歌い、舞う。踊り手たちの底力が大きくなうねりとなって人々の心を奮い立たせ、次の一步を歩ませる。そんな力があるように感じた。

だが一方で、祭りや郷土芸能などを復活させる取り組みが、これまでどおりの地域の再生、持続を約束するものではないという現状が、黒崎浩行氏によって指摘され、さらに次のように続く。

写真1 第五回三陸海の盆（平成27年8月11日）



ボランティアや財団などからの支援を受けての復活や、避難・移住先での再現といったところにおいて、祭りや儀礼の、民俗芸能を営んできた基盤が変容することに留意する必要があるだろう。そのうえで、こうした取り組みの長期的な展望や可能性に注目していきたい。⁷⁾

このことを受けて、郷土芸能や祭りを営む基盤についてあらためて考えてみたい。

祈りの記憶と場所

伝統芸能や祭りの復活が、復興へと人々の心を奮い立たせる一方で、氏子の激減、社殿の倒壊等で、神社の再建は被災地のあちこちで困難に直面している。

「生活を立て直すことが、まずは第一。今、神社の再建のために寄付を集めることなど考えられない」。「神社の復興は、五年先、十年先になるだろう」。震災から四年が経つ気仙沼市で、お二人の神社の宮司さんから伺った言葉である。震災と津波による被害で壊され、そのまま失われた神社、人々が離れ、参道が崩れたまま背丈ほどの雑草に覆われ、参拝が困難になった神社もある。その場所には確かに先人たちの祈りの集積があった。その場所での祭りや行事、日常の記憶を掘り起こし共有すること、親しんだ神社に再び参拝できることは、その土地の住民にとって大切なことであると、被災地において知ることが幾度となくあった。

気仙沼市本吉町小泉地区の八幡神社の本宮が鎮座する境内は、一步踏み入れただけで濃密な空気に包まれ、心が静かになる。長く濃密な時間とここに住む人たちの信仰や様々な願いが集まって守られている場所である。八幡神社では、毎年九月に例祭が斎行される。津波によってこの地区は甚大な被害を受け、地区全体が集団移転することになった。八幡神社は里宮と宮司ご夫妻のご自宅、祭儀具等、すべてが流され、山の上の本宮のみが残った。

その年の御例祭は、地区の若者たちの「神輿で地区を元気づけたい」という熱意のもと行われ、以後、毎年斎行されている。私は翌平成二十四年

写真2 八幡神社境内と御社殿（平成27年3月8日）



から、ご縁あって毎年御例祭の場にいる。震災後三回目となる平成二十五年の例祭では、地元の中学生在が自分たちで大漁旗から作った法被をまとい、段ボールの神輿を担いで参加した。聞けばすべて自主的に行ったそうである。

翌年には、東京都杉並区の大宮八幡宮から寄贈された子供神輿を中学生たちが担ぎ、獅子舞を舞い、太鼓を叩きながら、流されてしまった町の跡を大人たちとともに練り歩いた。鮭の養殖の繁栄を願う川沿いの神事では、山内義夫宮司に教わりな

がら、玉串を捧げる子供たちの姿があった。地域と祭りの再興に積極的に関わるとともに、地域の産業と神社のつながりを知り、この土地の信仰を引継ぎ、担っていく姿を見た気がした。

芸能や祭りといった身体的行為、そして信仰心や祖先とのつながりが、その土地を基盤にして生まれ、同時に、その土地の「風土」を作っていく。風土は単なる自然ではなく、住民の人たち自身のアイデンティティーとなり、住民の人たちの存在そのものにとって不可欠な要素となる。そのようなことを念頭に、次章を記した。

写真3 平成二十五年八幡神社例祭で神輿を担ぐ中学生
(平成25年9月29日)



4. 震災の日、大鹿村にて

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、私は長野県下伊那郡大鹿村へ向かうバスの中にいた。大鹿村の民俗館「ろくべん館」が翌日に企画した、記録映像の上映会に参加する予定だった。その時には何が起こったかもわからぬまま村を目指した。大鹿村は、年に二度、村の神社を舞台に行

われる「大鹿歌舞伎」で知られた、南アルプスと伊那山地に挟まれた山間の地であり、中央構造線が村内を南北に通っている。

その晩、滞在先の友人宅で、画面に映し出される福島第一原子力発電所の様子や、方々で火を噴く被害の様子を信じられないような気持ちで見ていた。この国の何かが必ず大きく変わるだろう、変わらなくてはいけないと漠然と思った。それほどまでに今までにない衝撃で全身が揺さぶられた。この頃、大鹿村は、南アルプスを貫通し、同村を通過するために村の生活環境に影響を及ぼす、リニア中央新幹線の建設問題に揺れていたが、建設どころではなくなるのではないかと、その時は思った。震災の翌朝、道を歩くと親しく挨拶をしてくれる村の人たち、寒さで張りつめた澄んだ空気、山々に囲まれた村の美しい光景を、大きな不安と緊張感とともに鮮明に思い出す。

生活文化の中の宗教

この時に上映された民俗映像文化研究所の『越後奥三面——山に生かされた日々——』を、平成二十七年七月、ふたたび東京で観る機会があった。四年ぶりに観た映像にまた違った印象を受けた。奥三面は、新潟県の北部、山形県との県境にある朝日連峰の懐に位置し、鎌倉時代初期にできた集落である。縄文時代の遺跡が二か所あり、遠い昔から人々が暮らすのに適した豊饒な山の恵みがあったことを物語る。昭和五十八年当時、村には百二十人の村人が居住していたが、ダム建設により村は湖底に沈む運命にあった。

四季の村の暮らしを追う映像の中には自然と調和した人々の生活サイクルがあった。春は家族総出の山菜取り、田植え。夏には焼き畑、そして川での鮭、鱒漁、キノコ狩り。冬の貴重なタンパク源となるウサギや熊狩り。そのなかで、熊を捌く際の祈り、豊饒の神への祈り、虫除けのお経を木に貼って、川へと流す虫送りがある。そして大山祇神社への参拝、神前に供える笹竹と笹葉でつくった矢——。家の神、田の神、山の神を崇める村人たちの深い信仰心が、祈りや儀礼といった行為として、あるいは手の込んだ

だ供え物や祭儀具といった物のうちに見てとれた。また、そこには衣食住を支える土地の自然の恩恵のもとで生活を連綿と重ねてきた、祖先への畏敬の念が表れていた。

奥三面にはかつて栄えたマタギの文化があり、祖先が身に着けた狩猟衣が残る。木綿と麻の衣に動物の毛皮とスゲの蓑と笠という装いである。狩りをするのではなく、ただ「祖先がやったようにやってみたい」という村人たち数人が、その狩猟衣をまとい、雪深い山道を一步一步踏みしめて登る。その姿とともに映像は終わる。「山、山、山…、幾多の恩恵、心の支え、俺には山しかねえなあ、山の暮らししかねえなあ」という村の男性の言葉が耳に残った。そして、昭和六十年夏、集落の家屋建物が壊され、九月には閉村し、奥三面の集落はダム湖の底に沈んだ。

三月十一日の上映会について、「ろくべん館」の便り（平成二十三年四月号）には次のように記されていた。

この映画の上映会を企画した時は、同じ山国に暮らす私たちが、これまで失ってきたもの、失いつつあるものを確かめたいという気持ちがはたらいていたが、地震とその後の上映会を経て、「今あるもの」の中でどう生きていくのかという考えに変わった。便利を求め、利潤を求め、豊かさを求めた先が、今ほころびをきたしている。人間が築いてきた文明とは、自然の力の前になんと無力だったことだろう。本当の豊かさとはなんだったのだろう。そう考えた時に、今回の映画のもたらす意味は大きい。^⑧

そして、「私たちの住む山国の文化の中には、現在でも役立つものがまだまだ隠されており、それを掘り起こしてみるの、けっして無駄なことではない」と結ばれている。生活文化の中にある宗教は、人々の技術や儀礼の継承によって、今を生きる住民と、自然や祖先とを結びつける。「本当の豊かさ」の追求において、土地に残る宗教の存在は大切な意味を持つだろう。このような営みの中で住民はまた、その土地と深く結びつき、その土地や自然がかけがえのないものになっていく。オギュスタン・ベルク

氏は『風土学序説』の中で、風土と人間存在の関係を、「通態」という言葉で説明している。

〈通態〉は技術的な投射と象徴的な取入れという二重のプロセスである。(略)人間は自然のうちに超自然的なものを感じ取り、象徴を使って超自然的なものとの存在論的な絆を表現するようになっている。

人間は技術によって自らを外面化し、象徴によって自然を内面化し、表現する。このような意味で「環境は存在の構造の一部である」⁹⁾という。

この映像を観ながら私は、状況はもちろん大きく異なるが、福島第一原発の事故で避難を余儀なくされた人たちの姿と重ねずにはいられなかった。長い間、親密に暮らしてきた土地を離れること、それは経済効率といったことではとうてい代えることができない、人間存在の大切な部分が切り取られることである。

5. 飯舘村と山の神

平成二十七年七月二十七日、福島県相馬郡飯舘村を訪ねた。飯舘村は阿武隈山地の東側の中腹に位置し、福島第一原発から四十キロ離れているが、風向きから高濃度の放射性物質が降り注いだため、全村避難を強いられた。3062 戸、6729 人の人たちが国内外に避難している。(平成二十七年九月一日現在)¹⁰⁾ 家々にはカーテンが下がり、汚染土を入れた袋があちこちに積み重なっている。美しい自然の中でその光景の異様さが際立っていた。人の姿は見えないけれど、この村の人たちが背負ったいくつもの厳しい出来事を思い、重ねながら流れる景色を目で追っていた。この日、山津見神社、綿津見神社を参拝した。

山津見の神と放射性物質

飯館村佐須の山津見神社は、平成二十五年四月一日の拝殿と社務所が消失する悲惨な火事の後、立派な拝殿が再建されていた。正面階段上に坐る神の御眷属、二匹の白狼がまず目に入った。

山津見神社を参拝したいと強く感じていたのは、『見狼記——神獣ニホンオオカミ——』（平成二十四年二月十九日 NHK 放送）という番組を観てからだ。奥秩父をはじめ日本に残るオオカミ信仰を追ったものだった。そこには、見えないけれど確かに在るものを追い続け、信仰する人々が映っていた。

写真4 山津見神社の白狼（平成27年7月27日）



埼玉県大里郡寄居町釜山神社の岩松新岳宮司が毎月お勤めする「お炊き上げ神事」は、三百年続く。息を切らしながら一升分のお櫃を背負って山頂の奥の院まで登り、近くの谷間でお櫃を供え、祝詞をあげる。岩松宮司は、「自然が荒れないで一年間無事に収まってくださいというのが主眼」であり、ご自身の「宿命、運命」とおっしゃっていたが、その姿に、自然と神と人々を結ぶ神職の本来的な役割を見た気がした。

そして、飯館村のオオカミを祀る山津見神社。福島第一原子力発電所の事故以来、参拝者が激減したが、現在も熱心な信者さんが訪れる。「山津見様が頭から離れたことがなかった」と言う南相馬から参拝に来た女性。その場所には、放射性物質の脅威、科学技術の力と、自然への畏怖と信仰心、オオカミの力という、二つの現象が同時に映っていた。この現象が共存できない段階にあることを、原発事故後の自然と人間に与えた修復できない傷跡は教えている。

山の神を祀る山津見神社は、飯館村のあちこちに鎮座する。『飯館村史』

④にある大正期の「氏神台帳」によると、同村には百以上の「山神」が祀られ、山仕事の無事を祈念する「山神講」が組織されていた。山とその恵みが、人々の生活を支えてきたことがわかる。

山の神は、国土を守護される神で、国土のシンボルであり、もっとも清浄なところの『山』をお名前にしておられるのです。お使いに猛々しい白狼を駆使されて速やかに奇験を現しますので『高神』『荒神』と畏れられております」（『山津見神社御由緒書』より）

「もっとも清浄なところの山」——。放射性物質による山々や大地への汚染は、飯館の山の神の怒りに触れたと思った。村の自然は美しく、神の怒りも放射性物質も表面上見えない。だが、見えないものを感じ取り、思考を重ねて言葉を紡いでいくことが今、求められている。

自然への畏敬と神道

同日、飯館村草野の綿津見神社を参拝した。この地にとどまり村の神社と信仰を守り続ける綿津見神社の多田宏宮司は、私が訪れたときも、住民の方の他地域での地鎮祭、避難先から来た住民の方の御祈禱と、忙しくされていた。藤田庄市氏のルポには、何百年も続いていたであろう、同村の大倉地区の福善寺で行われていた「葉山籠もり」、大倉地区山津見神社の「浜降り神事」が、震災後、原発事故により途絶えたことを伝えている。そこに記された「原発事故は伝統をもひっくり返して根こそぎ失わせてしまった」という、多田宮司の言葉が重い。^⑫

太田宏人氏のルポには、飯館村の多くの就労世帯が村への帰還を諦めていることを伝える。その中で、「心のよりどころはあくまでも飯館村の氏神様」と言う人たちが多いという。だが、避難先が「居住地」となった次の世代の人たちにとって、「彼らが寄る辺となる宗教的なネットワークは存在するのだろうか」と疑問を投げかけている。^⑬

『河北新報』の連載「挽歌の宛先」には、福島第一原発の事故で全村避

難を強いられた、福島県浪江町の初発神社に奉仕されている、田村貴正禰宜の言葉があった。「神道は神宿る自然に感謝し奉仕する。罪やけがれを除くために手を洗い、口をすすぎお祓いをする。水と恵みをもたらす大地、森林。全てが放射能にまみれた」。そして、田村禰宜の言葉は続く。「人が創り出した原発で水や土を汚してはならない。どうやって、どこから清めていけばいいのか」。¹⁴

原発事故の被害は、あらゆる生命に及んだ。先の連載には、放射能汚染のため、安楽死や餓死に追い込まれた家畜の慰霊祭が相馬小高神社で行われ、同社には数十枚の絵馬に書かれた哀悼の言葉が納められているとある。また、この記事には、家畜の安楽死に携わった福島県職員の苦悩が語られている。安楽死処分された牛 1692 頭、豚 3372 頭——。「慰霊祭をしても自分たちの行いは消えないが、少しでも気持ちが和らげば」「自分が死んだら地獄に落ちると思った」。¹⁵

悲痛な現実の中にある、あらゆる生命の魂を慰め、人の苦悩を和らげる神道の役割を思った。そして、神職には「神宿る自然に感謝する」、人々と神々と自然とを「つなぐ」という役割がある、と。

ここで、神道への信仰を根底とした、宗教的な倫理というものを立ち上げていくとしたら、自然への謙虚さと畏敬の念に基づくだろう。それらは自然の尊厳、あらゆる生命の尊厳、日本人の生活文化への理解、祖先への畏敬の念に関わる。

これまでに原子力発電は、我々に一面的な「豊かさ」という恩恵をもたらしてきたが、事故のリスクを抜きにしてその是非を論じることはできなくなった。ひとたび事故を起こせば、大地や海を汚し、自然や住民の生活に対する損傷は修復不能になる。そして、我々の生命の有する時間を遙かに超えて、後の幾世代にまで汚れを残し続ける。その時間は、祈り（宗教）が継承されていく時間とは重なりえない。

神宿る自然を汚す。神職として、その一点からでも原子力政策は転換しなくてはならないと考える。重ねて、原発事故により避難を余儀なくされた方々や作業にあたる方々への精神的身体的苦痛を生み出した罪、それを生み出す社会の構造上の歪みからも是非が問われなくてはならない。

岡田真美子氏は、福島第一原発事故を受けてのドイツのメルケル首相による原子力政策の迅速な方向転換を示して、宗教界における全日本仏教会、カトリック司教団の宣言文やメッセージを、宗教界の新しい動きとして挙げ、次のように述べている。¹⁶⁾

ポスト原発事故の原子力哲学に対して、宗教者の果たす役割は大きい。これから長きにわたって非常に困難な復興の道のりを歩んでいかなければならない時宗教者たちが手を携えて逃げず、ごまかさず、誠実に行動していくことがこれまで以上に重要な意味を持つだろう。

時代の転換点において新たな方向性が求められる中、宗教者には、言葉や行動における責任と役割がある。自ら思考し、信仰に根ざした倫理を立ち上げていくよう求められていると感じている。

6. おわりに 故郷の山の神によせて

栃木県日光市の霊山である男体山の麓の集落で、私は生まれ育った。男体山を祀る二荒山神社の幼稚園で毎朝、「二荒山の大神よ守りたまえ」と皆で拝礼していた。日々山を仰ぎ、おのずと山の神を崇めていた。山は神のおはしますところであり、侵すはずのない領域だった。霊山を背景に、小学校の白樺並木、冬には目の前が見えぬほど霧深い故郷の光景が、今では白く美しい幻想のように思い浮かぶ。そして、いつの頃だったか小学校の教室で、同県の足尾銅山鉍毒事件について知り、強く関心を持ったことをよく覚えている。今思うと、人間のある営みが、自然や人間の何か大切な部分を壊していくことを知った最初であったのだろう。この頃この場所におそらく私の土台がある。八十年代の初め、神奈川県へと移り住むことになるのだが、日本の社会全体が物質的に急速に豊かに便利になっていくのを子供ながらに感じつつ、自然と離れていくことへの身体的精神的な違和感を抱えて生きてきた。

東京の大学に入学してからは様々な社会の問題に触れ、本来の人間性とは何か、生死についての問いが切実になり始めた。自然と自然の一部である人間ひとりひとりの価値や意味が見失われていく果てに、環境破壊や公害、戦争、ホロコースト、人間の罪が重ねられ、人々の悲しみや苦しみが生まれるのではないだろうか――。

科学主義、経済至上主義のもと、自然を管理下におこうとする人間が、逆に自然から世界から疎外されていくことになる。効率性や合理性の物差しでは測れない、人間と自然、異界との関係性も意味も失われた窮屈な世界、そんな中にいて人はどこか損なわれなければならないはずがない。日本人の生活文化、そして生態系から逸脱した技術体系の問題性を浮き彫りにして、そのもとにある自然観を再考する必要がある――。

そのようにして社会思想を専攻した後、縄文文化を学ぶため考古学へ入門したのも、人間の自然性や技術、文化の根源を追求したいという思いからだったが、その領域と方法で生身の人間を見出すのは、私にとって困難だった。人間を自然性のうちのみ捉えていると、社会、歴史の中での人間を見失う。人類の「進歩」のなかでの不条理な死、それをどのように受けとめていけばいいのか、生き方としての問いだった。

十年以上も前だろうか、ある年の八月六日、広島市内を流れる元安川での灯籠流しを呆然と眺めていた私は、ふいに川を流れる灯が亡くなった方々の魂のように感じた。その時に漠然と、慰霊、鎮魂という人間の魂に向き合うことを思った。また、「それは宗教の範疇にある」と。私は十年もの間、学の世界に片足をひっかけながら揺れながら拠りどころのようなものを探していたように思う。そして背中を押す諸々の事情があったが、神職に就くという決断は、自然な流れの末にある。

人の心や魂、神、自然に触れることは、社会における危機感、違和感その空気を感じとることも同様に、身体感覚、感性を研ぎ澄ますよう求められる。そして、物事が政治や経済の言葉で語られると、現実を直視する目も曇り、本質を見失ってしまう。他者や自然に与える、痛みや冒流に対して感覚が麻痺してしまうことがある。それゆえどのような問題に際しても、私は、日常感覚、生活世界に立ち戻ろうと思う。

多くの方々が亡くなった震災から五年が経とうとする現在、震災の記憶の風化が言われる。周囲から、なぜ今になってもそこまでこだわるのかと問われることがある。温度差をたびたび感じる。それを被災地の方はどう感じているのかと思うと心が痛む。私自身は五年という時間の長さを感じていない。この時間感覚は、なぜ関わり続けるのかという問いへの一つの答えでもあるだろう。宗教における時間は、いつも物理的な時間や人の一生をも包括したところにあり、流れぬ場所があるように思う。今、周囲の流れや変化を感じながらも踏み留まるべき場所がある。そこにおいて過去や未来とも対話しよう。

執筆中に、ほぼ三十年ぶりに男体山に登拝した時のことを思い出した。小雨が降る中、霧深い山中をひたすらに登るうちに、長い間守られ、心を支えられてきた山への感謝と畏れを確かに感じた。

注

-
- ① 鎌田東二、玄侑宗久『原子力と宗教—日本人への問い』角川学芸出版、2012年、202頁。
- ② 磯前順一『死者のざわめき—被災地信仰論—』河出書房新社、2015年、245頁。
- ③ 復興庁ホームページ「全国避難者等の数」
(<http://www.reconstruction.go.jp/topics/maincat2/subcat2-1/hinanshasuu.html> 2015年9月27日最終アクセス)
- ④ 若松英輔『涙のしずくに洗われて咲きいづるもの』河出書房新社、2014年、97、98頁。
- ⑤ 金子昭「宗教の救済力はどこにあるか」(『現代宗教2012』2012年)、78、79頁。
- ⑥ 黒崎浩行「復興の困難さと神社神道」(『現代宗教2014』2014年)、246頁。
- ⑦ 黒崎浩行「地域再生のため宗教に何ができるか」(小熊英二・赤坂憲雄編『ゴーストタウンから死者は出ない』人文書院、2015年)、259頁。
- ⑧ 「ろくべん館だより」(2011年4月号)
(<http://www.osk.janis.or.jp/~mtl-muse/subindex01-02rokuben.htm> 2015年9月20日最終アクセス)
- ⑨ オギュスタン・ベルク『風土学序説—文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に—』中山元訳、筑摩書房、2002年、226頁。
- ⑩ 村全域が避難指示区域に指定され、放射線量に応じて、帰還困難区域、居住制限区域及び避難指示解除準備区域に分かれている。居住制限区域及び避難指示解除準備

備区域については、立入可能だが、村内全域において宿泊することはできない。

「飯館村—震災以降の飯館村を伝える情報サイト—」

(<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=8445> 2015年9月20日最終アクセス)

^① 飯館村史編纂委員会『飯館村史』、1976年、378、379、389頁。

^② 藤田庄市「福島県飯館村—神々に放射能が降った—」(『芸術新潮』7月号、2013年)

^③ 太田宏人「震災に『節目』はない」(『皇室62号』春号、2014年)

^④ 「挽歌の宛先〈祈りと震災〉(28) それでも神職を全う」(『河北新報』2015年4月1日)

^⑤ 「挽歌の宛先〈祈りと震災〉(30) 痛恨の絵馬が揺れる」(『河北新報』2015年4月3日)

^⑥ 岡田真美子「3・11 二一世紀の置書事始」(『現代宗教2012』2012年)、156、157頁。